

ニホンズイセン

星野史子

平成二十八年も余すところ数時間となりき。我、厚手のセーターにマフラー、ジャンパーを羽織りて寺に向ひけり。此度は昨年よりも少し早めに行きて我が友の為に護摩木のお焚き上げを頼まんと思へばなり。友よりこの大晦日築地ガンセンターに行き、病に伏したる父親の枕元にて新年を迎ふと聞きたる故なり。深夜零時、新年護摩法要にて「病氣平癒」を願はんとす。否否、担当医師より余命半日との宣告ありと聞けり。嗚呼、護摩木には何をか書かん、不動尊には何をか祈らんと心乱れるなり。

友は米国航空会社の女性幹部なり。この年末年始の繁忙期に欠勤することの困難さと一人娘として看病すべき重荷との狭間にて苦悩甚しき様なり。痛みに耐へある父親の口から漏れしは「バカ 帰れ」との一言のみなりとぞ。その言葉に友は困惑し、娘が心に突き刺さされりと目に涙たむるなり。

翌日元旦、友よりメールあり、「数十年ぶりにして父娘二人のみの正月を迎へたり」と。静かなる病院の夜、既に意識の薄れし父親の枕元に付添ひ、酸素マスクを付けたる父親の声なき声を心の内に聞き、社会的責任ある仕事に着きをりし娘への父親の気遣ひを知りえたり。父と娘は自分達の遠き記憶を辿り親子にてあることを再確認し合ひし一夜になりけり、と言ふ。されど、その数日後お父上の訃報我が許に届きぬ。

お通夜の晩は格別の冷え込みなりき。すらりとせる喪服の友は、今までお世話になりし父親の友人知人に鄭重なる挨拶をされ、悲しみに必死に堪へながらも挨拶をかへす、そのキリリとせる物腰はキャリヤウーマンならではのことならんか。この職業にて鍛へ抜かれし綺麗なる笑顔が、殊更に悲しみを添へたり。

今年になりての年明け、年初めの華道教室に、友も参加せり。花材は「ニホンズイセン」なり。厳しき寒さの中にかすかなる春の香りを届くる花なり。春告げ花なり。すつと伸びし莖、小さき黄色の花一輪に四枚の細長き葉を付れたり。冷たき風の中にしなやかに力強く可憐に咲くニホンズイセンの花は今の友のごとき姿なり。娘は父の最期に「パパの娘であることを誇りに思ふ」と告げたりと聞く。その独り娘からは、看護、葬儀と全て独りにて成し遂げし安堵感と、つつがなき後始末への自信すら感じられたり。親とは自身最期の淵にても、更に子供を大きく成長させるものならんとぞ感に堪へざる所なる。

春はまた巡り來たらん。四十九日過ぎし折、花が咲き誇る頃、友を囲み皆にて食事を共にせんとぞ思ふ。

—あの世この世と 隔つれど 通はすこころ ひとすぢに おなじさとりの 道あゆむ 契りは永遠に つきせじな—（「追善供養和讃」）